

天賦の記

岡部耕大

34

ある日、美少女は予告なしに転校していった。空いた美少女の机には、すぐに転校して来たゴツい男が座った。ゴツいとトロいではえらい違いである。美少女の父は炭鉱マンであった。一瞬の恋。いま、どうしているのだろうか、どこかで結婚はしたのだろうか。したとすれば、もう立派な孫がいてもいい年である。名前も顔すらも忘れた美

少女のあれやこれやを推測する。

女はリアリストである、過去は忘れて生きる。男はいつも口

マンチストである、捨てられても過去を追う。後年、名古屋で

あれを書かなければいけない、うたらしい格好でテレビを見

あの人を書こう。故郷の人や風景を思い浮かべながら、いつの間にか寝入っている。

朝は和食である。洋食にした時期もあったが、すぐに和食に

つと牛乳があればいい。午後からは机に着くが、あれやこれ

屋は軽食である。あんぱん

が研いだ四、五十本の鉛筆の山が、夕暮れにはすべて丸くなっていった。原稿は夜中にバイク便が取りに来ていた。いまはすべてメールである。メールにな

夕暮れ、集中心力がぶつんと切れる。音を立てて切れる。その日の執筆が終了する瞬間である。締め切りが迫れば徹夜も辞さないが、通常はそんなものではないが、通常はそんなものである。

それからチワワのナナちゃんを連れての散歩である。7月7日にわが家に来たからナナである。しゅんは五木寛之の「青春の門」の「織江の唄」から取った。(松浦市出身)

おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

故郷が思い浮かぶ

「トロくしゃあ」の言葉を聞いた。戻った。ホテルや旅館でも和食である。午前中は座椅子に座り、テーブルに足を投げ出すとい

か

やと、やはり故郷の人と風景を思い浮かべる。昔は原稿用紙に鉛筆で書いたものである。妻

それからチワワのナナちゃんを連れての散歩である。7月7日にわが家に来たからナナである。しゅんは五木寛之の「青春の門」の「織江の唄」から取った。(松浦市出身)



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。